

〈論文〉

賛否両論の場における「ね」「よね」の ポライトネス機能

— 日本語母語話者を対象に —

鄭 智 恵

キーワード：ディベート、日本語、ね、よね、コミュニケーション機能

1. はじめに

賛否両論—ディベートの場での終助詞「ね」、「よ」、「よね」の使用について調査を行った結果、日本語母語話者は「ね」を多用している（鄭 2009a）のに対して、台湾人日本語学習者は「よね」を多用している（鄭 2009b）ことがわかった。「ね」と「よね」は、この賛否両論、反対意見の陳述となるディベートにおいて、どのようなコミュニケーション機能があり、使用効果をもたらすのかは興味深い問題である。本稿では、大学生グループ（鄭 2009a）以外に、高校生、中学生の両グループを加えて調査対象を広げて論究する。

鄭（2009a）の結果と同様に、日本語母語話者は「よね」よりも、「ね」を好んで使うのが再確認できた。とくに大学生グループの「ね」については、質疑側（Q）も応答側（R）も、使用頻度の高い結果が得られた。大学生グループの「ね」の結果を除くと、全体的にはQはRより「ね」、「よね」を多用している。

「ね」と「よね」のコミュニケーション機能を、宇佐美（1997）の自然談話では5機能を、ディベートでは8機能を、考察することができた。ディベートの場においては、「確認」機能を更に下位分類をし、聞き直しによる確認、予想する答えの確認、聞き返しによる確認、の3つの「確認」機能を付け加えることができると考える。そしてBrown & Levinson（1987）のポライトネスの枠組みでは、「ね」にはネガティブ・ポライトネスの傾向（発話の緩和機能・発話の埋め合わせ）があり、「よね」にはポジティブ・ポライトネスの傾向（注意の喚起・聞き直しによる確認）がある、との結果が示されている。

2. 先行研究

「ね」、「よね」についての研究（白川 1992, 田窪・金水 1996, 伊豆原 1993, 2003）が多くみられる中、議論場面、賛否両論—ディベートの場における「ね」「よね」の研究は、管見の限りあまりない。大塚（2000, 2002, 2003）によれば、「日本語の文末表現は、コミュニケーションを円滑にするためには欠かせない要素の一つであり、これは『ポライトネス』にかかわるものである」という。

現在ポライトネス理論でもっとも包括的で有力なのは、Brown & Levinson（1987）（以下 B & L と示す）の「ポライトネスの普遍理論」である。B & L は、「『ポライトネス』は普遍的な使用であると唱え、文化の違いによる表現の違いがあっても、根底にあるポライトな言語行動はあらゆる文化圏で共通する」という。ポジティブ・フェイスかネガティブ・フェイスかのどちらかを先行することにより、用いられるポライトネス・ストラテジーに違いが出てくるのである。ポライトネス・ストラテジーには、直言、ポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・ポライトネス、ほのめかし、何も言わない、の 5 段階のストラテジーがある。

宇佐美（1997）では、自然談話における「ね」と「よね」を取り上げて、ディスコース・ポライトネスの観点から、「よね」を含む「ね」を考察している。その結果、コミュニケーション機能による「ね」を、会話促進（PP）、注意喚起（多用すると無礼となる）、発話の緩和（NP）、発話内容の確認（N）、発話の埋め合わせ（NP）、の 5 類に分けた。

本稿では、宇佐美（1997）の分類を参照し、「ね」と「よね」を区別して、それぞれのもつポライトネス機能を、自然談話の場ではなく、賛否両論—ディベートの場において考究をしたい。

3. 調査資料

【調査対象】日本語母語話者の大学生^(注)、高校生、中学生の 3 グループである。

【データ収集の方法】

1. 大学生グループ：日本ディベート協会（JDA）主催の第 1 回から第 13 回の決勝戦、計 18 試合（ネット上で公開された文字化資料：<http://japan-debate-association.org/実録・JDA ディベート大会>）
2. 高校生グループ：計 6 試合（『全国中学・高校ディベート選手権第 1 回から第 6 回ディベート甲子園、中学／高校決勝戦・全記録』全国教室ディベート連盟編、学事出版）
3. 中学生グループ：計 6 試合（同上）

【集計の方法】

マイクロ・ソフト社のオフィス 2007 のエクセル・ソフトのフィルター機能を使用し、文頭、文中、文末に現れる「ね」、「よね」を集計した。

【調査データ】

本稿は、ディベートの3つの構成（立論・質疑・反駁）の中から、発話連鎖と考えられる「質疑」（3分間×2回）を取り上げて考察を行う。1試合においては、否定側質疑（Negative Questioner, NQ と略す）対肯定側応答（Affirmative Respondent, AR と略す）、肯定側質疑（Affirmative Questioner, AQ と略す）対否定側応答（Negative Respondent, NR と略す）、の2回の質疑がある。調査データの詳細は表1の通りである。

表1 調査データ

調査対象グループ	調査データ（単位：分）
1 大学生	108（3分間×2回×18試合）
2 高校生	36（3分間×2回×6試合）
3 中学生	36（3分間×2回×6試合）
合計	180分間

4. 結果と考察

4.1 試合ディベートにみられる「ね」「よね」の頻度及びQ：R（質疑側：応答側）の差

大学生、高校生、中学生の「ね」、「よね」の使用は、3グループとも質疑側のQが多く使っていることが、図1でわかる。大学生のRの「ね」の結果を除くと、全般的には、QはRより「ね」、「よね」の使用頻度が高いのである。検定にかけた有意差の結果は、表2に示す。

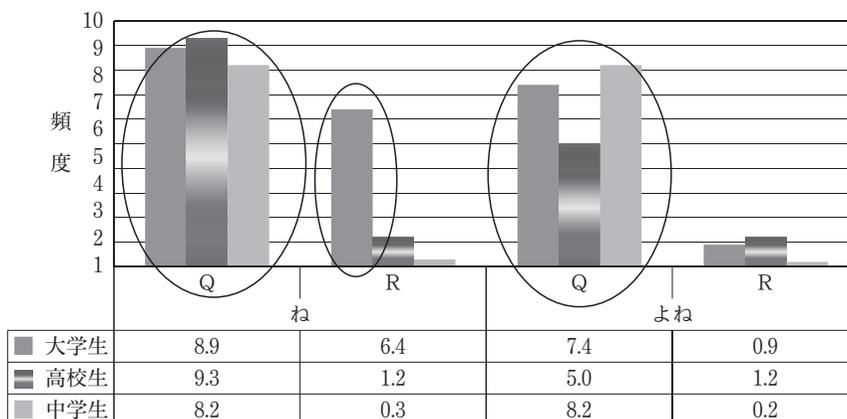


図1 1試合にみられる「ね」「よね」

表2 検定*でみる差異

2者間比較	等分散性	検定法	P(両側)	有意差	df	F値	
ね>よね	.737	独立サン プルt検 定	.013	<.05	118	.113	
大学生:ね>よね	.373		.009	<.05	70	.802	
高校生:ね≒よね	.083		.297	無	22	3.303	
中学生:ね≒よね	.880		.973	無	22	.023	
「ね」Q>R	.120		.000	<.05	58	2.484	
大学生ね:Q≒R	.276		.122	無	34	1.224	
高校生ね:Q>R	.004		.012	<.05	10	14.393	
中学生ね:Q>R	.002		.006	<.05	10	16.644	
「よね」Q>R	.000		.000	<.05	58	31.655	
大学生よね:Q>R	.000		.001	<.05	34	22.346	
高校生よね:Q>R	.492		.044	<.05	10	.509	
中学生よね:Q>R	.001		.015	<.05	10	21.98	
3者間比較	等分散性		検定法	P	有意差	G内df	G間df
大学生≒高校生≒中学生	.689	一元配置 分散分析	.274	無	117	2	1.309
ね:大学生≒高校生≒中学生	.448		.109	無	57	2	2.308
よね:大学生≒高校生≒中学生	.408		.848	無	57	2	.166

*有意差検定は、統計ソフトのSPSS 17.0を用いた。

表2で網がかかっている部分は、有意差がみられた結果である。母語話者全般は、「ね」を「よね」より多く使っていることが分かる。その中で、大学生グループからの寄与率が高いことも表2でうかがえる。QR別をみると、大学生はQもRも、「ね」の使用頻度が高い。Qは「ね」、「よね」を多く使用しているということは、質問する側にとってあるコミュニケーション効果、つまりポライトネス機能があつての使用と考えられる。コミュニケーションにはどのようなポライトネス効果をもたらすのかを、次項で考察を行う。

4.2 コミュニケーション機能の分類

賛否両論—ディベートの場面における「ね」と「よね」を、宇佐美(1997)の自然談話の5機能から最終的には8機能に分けることができると考えられる。機能1から機能3は、ポジティブ・ポライトネス(PP)であり、機能4から機能5は、ネガティブ・ポライトネス(NP)である。そしてニュートラル(N)は、機能6-1, 6-2, そして機能7であり、ニュートラル(N)またはインポライトネス(IP)は、機能8である。各機能についての説明及び例文は、表3に示す。

表3は、左から右の順で、ポライトネスを示す「類」、1~8の「機能別」、「機能の説明」、そして「例文」となっている。「例文」の項でみられる太字・斜体の文字は、発話者が表現しようとする「ね」と「よね」のポライトネス機能の例文である。

表3 「ね」と「よね」の機能分け、及び例文

類	機能	機能についての説明	例文
PP	機能1：聞き直しによる確認	先行する対話内容に含まれているものを拡張・縮約する。話し手は聞き手の発話内容の繰り返し、整理、自分なりの解釈・まとめ、箇所の強調によって聞き手の同感を得ようとする。	NQ：この恐ろしい数字という99.8%は、何の数字ですか。 AR：これは検察官が、逮捕…検察官が起訴した人が有罪になる割合を示しております。検察官が起訴をした（中断された）。 NQ：有罪率が現状では99.8%ですね。
PP	機能2：予想する答えの確認	情報は共有しており、話し手は聞き手の答えを予想して確認する。予想外の答えが返ってくる場合もある。	AQ：よろしいですか。 NR：はい。 AQ：私の議論に対しての反論に関して、まずお聞きしたいんですが、公務員の方は給料をもらっていて…日本の公務員の方は信頼できる、ということですかね。
PP	機能3：会話促進	広義的な「あいづち」の作用がある	NQ：刑事訴訟法の条文に、「別件逮捕は違法である」という規定があるわけですか。 AR：そうですね。 NQ：では、あとで条文をみせてください。
NP	機能4：発話の埋め合わせ	言い淀んだ時、次の表現の時間稼ぎの時に使われる。注意喚起の働きが強い	AQ：まず弊害から、質問させていただきます。基本的に弊害はですね、現在は弱者切り捨ての必要があると。肯定側のプランによってその歯止めがなくなってしまうということなのですが、 現在ですね 、政府が、弱者切り捨ての、 そういう思想をもっている としますね。
NP	機能5：発話の緩和	優勢の立場から、自分の発話、口調を和らげる。	
N	機能6の1：聞き返しによる確認	先方発話の不明な箇所の再確認	AQ：はい、ありがとうございます。次に移らせていただきます。デメリット1の発生過程1のところで、 Bのところですかね 。勉強する人が減ると言っていました。
N	機能6の2：聞き返しによる確認	話し手が聞き手の発話内容字義通りの箇所を再確認する	AQ：まずはじめに、発生過程1のところ。トラブルは、アメリカが日本の10倍で、 機器故障が100倍から1000倍とか言っておられましたね 。
N	機能7：注意喚起	先行した対話内容に含まれていない情報の喚起	NQ：プランで、 土地騰貴を防止する策を行っていませんね 。 AR：立論では上げていません。 NQ：それは、つまり、地価高騰のおそれがありますね。
N or IP	機能8：復唱による強調	先方の発話内容の一部または全部を取り上げて復唱する。時には一種の反論ともなる。	NQ：プランには、学校の時間や勤務時間を削るというプランは 入っていませんよね 。 AR：具体的には成文化してはいません。 NQ： 入っていませんね 。 AR：成文化はしていません。 NQ： 入っていませんね 。 AR：文章にはなっていません。

4.3 「ね」と「よね」それぞれにみられるポライトネスの傾向

前々項の表2の有意差検定で、大学生、高校生、中学生の3グループでは有意差がみられなかったという結果をふまえて、この3グループを1つの「日本語母語話者」グループと見なし、「ね」と「よね」をポライトネスの枠組みにおいて考察をする。図2は「ね」についての結果であり、図

3は「よね」についての結果である。図2の「ね」の結果は右下に偏り、図3の「よね」の結果は左上に偏っていることがわかる。

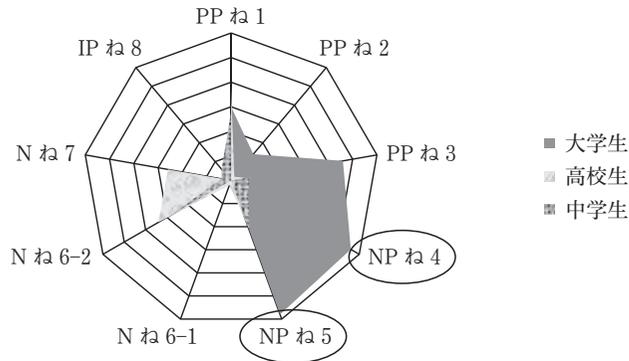


図2

図2の「ね」の結果の上位2位を取ってみると、「NPね5」は、ネガティブ・ポライトネスの機能5の「発話の緩和」、「NPね4」は、ネガティブ・ポライトネスの機能4の「発話の埋め合わせ」である。日本語の「ね」は、ネガティブ・ポライトネスの傾向が強いことが考察できよう。

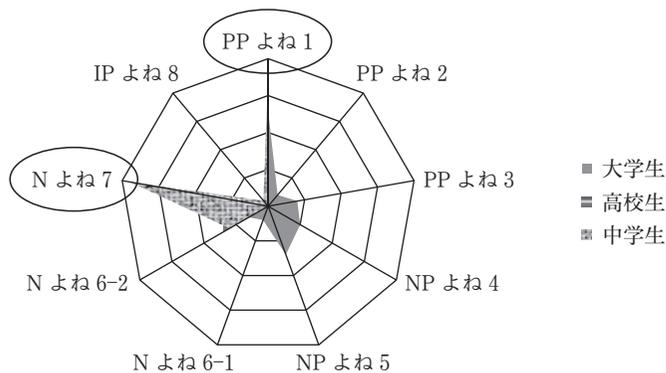


図3

次に、図3の「よね」の結果の上位2位を取ってみる。「Nよね7」は、ニュートラルの機能7の「注意喚起」であり、「PPよね1」は、ポジティブ・ポライトネスの機能1の「聞き直しによる確認」である。「よね」は、ポジティブ・ポライトネスの傾向が強いことが考察される。

5. まとめ

日本語母語話者はディベートでは、「ね」をネガティブ・ポライトネスとして使っており、「よね」をポジティブ・ポライトネスとして使っていることが考察された。全体的には、ネガティブ・ポライトネスの傾向にある(表2:ね>よね)。とくに大学生は、ネガティブ・ポライトネスの使用傾向が強い(表2:ね>よね)。一方、高校生と中学生は、ポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・

ポライトネス両方の使用には、大差はみられなかったのである（表2：ね≒よね）。これは、学年差の表れとも考えられよう。

質疑側と応答側の差異で、3グループの結果をまとめると、「ね」においては、大学生グループでは、QもRもネガティブ・ポライトネスである（表2：Q≒R）のに対して、高校生と中学生グループでは、質問する側は応答側よりネガティブ・ポライトネスであることがわかった（表2：Q>R）。「よね」においては、3グループともQはRより働きの強いポジティブ・ポライトネスであると観察されたのである（表2：Q>R）。

6. 今後の課題

本稿は、ディベートの「質疑応答」を調査の場として取り上げたが、議題のある自然談話との比較も、これから行いたいと考える。

今回、調査対象となった日本語母語話者以外に、日本語学習者の「ね」と「よね」の使用実態の解明もこれから行い、母語話者との対照研究によって異同を明らかにし、日本語教育に提示できる示唆を得ることを今後の課題としたい。

付 記

本稿は、JSAA-ICJLE 2009 (A Joint Conference for the Japanese Studies Association of Australia Conference and the International Conference on Japanese Language Education, 2009.7.15, Sydney, Australia) で口頭発表した内容を、小幅に修正し加筆したものである。

謝 辞

論文執筆にあたり、JDA 専務理事・立教大学松本茂教授からデータの使用許可をいただいた。原隆幸先生、西川寛之先生、松田直人さんの助言をいただいた。この場を借りて深く御礼申し上げたい。

〈注〉

JDA 決勝戦の出場者は社会人と大学生がいる。社会人といっても、社会に入って間もないOBとしての参加者であるため、本稿では一括して大学生グループとして扱う。

参考文献 (アルファベット順)

- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- 伊豆原英子 (1993) 「「ね」と「よ」再考 —「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80, 103-114
- (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』51 巻 2号, 1-15
- 大塚容子 (2000) 「テレビ討論における文末表現—ポライトネスの観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要』39, 113-125
- (2002) 「ディベートにおけるメタ言語表現 —日本語学習者の場合」『岐阜聖徳学園大学紀要』41, 55-67
- (2003) 「ディベートにおける文末表現」『岐阜聖徳学園大学紀要』42, 33-45
- 白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77, 36-48

- 田窪行則・金水敏（1996）「対話と共有知識 — 談話管理理論の立場から —」『月刊言語』25, No. 1, 30-39
- 鄭 智恵（2009a）「ディベートにみられる終助詞「ね」「よ」「よね」の使用—日本語母語話者を対象に」『明海日本語』14, 明海大学日本語学会, 91-92
- （2009b）「直言表現にみられるポライトネス・ストラテジーの使用について — 台湾大学生の日本語ディベートを例に —」銘傳大学 2009 国際学術シンポジウム, 大会論文集, 89-96
- 宇佐美まゆみ（1997）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』ひつじ書房, 241-269